



令和7年度クリスマス会の様子♪

みんなでケーキの飾りつけをしました！



食事の様子



参加いただきありがとうございました！



投稿コーナー

ペンネーム・そらさんの体験談から 見えないつらさや不便さ、だれにでも起こり得ることであること、どのように乗り越え今の自分がいるのかを伝えていきます。

No.22 「名前のない病」

最近、胸のざわつくことが多くなり、毎日その状態になるのを恐れて暮らしています。とにかく落ち着いて一人であることに耐えられなくなり、体の中心から力が入らなくなり何も手につかなくなります。人様と話をしている時だけ和らぐのですが、そんなにいつでも話しかけられるわけでもありません。精神科やカウンセリングにも通っていますが私自身は医師の指摘する自律神経のバランスの崩れだけでなく異常な程の寂しさ、喪失感も原因ではないかと思っています。文字通り心に穴が開いているような。科学者の柳澤桂子さんが医師にも単なる病気として理解されなかった不調を「認められぬ病」と表現していましたが、何だかその言葉が浮かんできました。私は言葉で人に症状が上手く伝えられぬもどかしさを感じています。同じ様な人がいないというのも心細いです。ここ数年、症状に深く陥らないようにと願いながら毎日一分でも気の休まる時間を探し求めて、逆に心身休めぬ感じでした。特効薬は何でしょうか。落ち着いて暮らしてみたいです。

○宮城野区障害者自立支援協議会○



実務者ネットワーク会議全体会

令和7年12月18日に実務者ネットワーク会議第2回全体会を開催しました。

令和6年から「ライフステージ～支援のつなぎ目に着目して～」をメインテーマに地域のネットワークづくりを強化するための取り組みを行ってきました。

第2回全体会ではテーマ別会議（「児童」「介護保険への移行」「触法」）の報告やグループワークを行いました。

○テーマ別会議○

児童→放課後等デイサービス事業所のネットワークづくりを目指し、令和7年度は2回開催し、事例の共有や勉強会を行いました。

介護保険への移行→制度の違いの理解や移行時の連携をスムーズに行う事を目指し、令和7年度は1回開催し、開催前に障害分野、高齢分野の支援機関にアンケートを行いました。開催後は、協力機関4か所にインタビューを実施しました。

触法→司法との連携や支援機関への理解促進を目指し、令和7年度は2回開催し、事例の共有や当事者とのセッションを行いました。

○グループワーク○

福祉分野以外（学校や司法）との繋がりが持てるとうい。小規模でざくばらんに話せる場も欲しい。就労部会があると良い。つなぎ目支援全体（事例や相談先など）を可視化したロードマップを作れるとういといった意見が挙がりました。



宮城野区地域ケア会議・区障害高齢課自立支援協議会合同会議

令和8年1月14日に開催しました。地域での取り組みについての紹介があり、

地域包括支援センターより、小学校と地域に住む高齢者との関わりについての取り組みの紹介がありました。

劇団を立ち上げ、認知症への理解促進を図る寸劇の披露や委員会を立ち上げ、コロナ禍でも地域との交流が無くなるように小学生と高齢者の手紙での交流の機会を設ける、コロナ明けからは小学生を対象に高齢者の疑似体験のイベントや小学生が高齢者のサークルに参加するなど継続して交流を図る機会を作っています。また、小学生が中心となり、フレイルリーフレットの作成や学校の発表会に地域の方を招待するなど、小学生主体で行う交流もあり、今後もこうした交流の機会を継続していくとのことです。

障害高齢課より、高齢の母親と2人暮らしであったが、母親が急逝し突然単身生活となってしまった方の事例について紹介がありました。

母親が地域との交流があったために地域の方も本人に障害があることを知っており、地域の民生委員からも障害高齢課に支援依頼がありました。自宅内はゴミ屋敷状態となっており、片付けを一緒に行うと共に民生委員や社会福祉協議会、相談支援事業所、ヘルパー事業所など本人と関わる支援者を増やしていきました。

誰かと一緒に行くことで本人も、ゴミ出しが一人でできるようになった、困ったことを話せるようになった、笑顔が増えたなど良い変化が見られるようになっており、今後も地域で本人の生活を見守っていきます。

グループワークでは、子どもや若い世代などの地域への関心の薄さを感じる。8050世帯はオープンにしていることも多く、他者との関係づくりに慣れていない。地域にある高齢者や障害者の施設入居者も地域のイベントで交流できるようにしている。認知症カフェを誰でも参加できるようにしたら子どもたちの参加が増えたとうい話がありました。